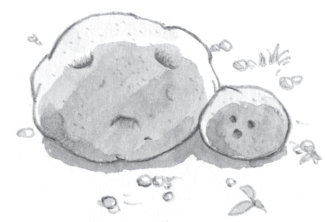


山のふもとにて……



青葉ゆう子

画・森邦生

いつものように小学校から帰る道で桃子が、
「私、家に帰ったら、今日も牛舎で牧草の手伝いするの」と、ぼそっとつぶやいた。

「うちも、ぼくの帰りを待って枝豆の袋詰めさ」
健太はため息をついた。

「俺だって、じいちゃんの手伝い暗くなるまでやらされるんだぞ」

太郎が負けたくないのか早口だ。

「りくは？」

と健太が聞いてきた。ぼくは、

「九月からイモの収穫だから色々お手伝いあるんだ」

そう答えると、みんなしばらく黙って歩いた。

学校から続く一本道の途中にぼくの家がある。道の向こ

う側一面にジャガイモ畑が広がっていて、見渡す限り緑色の葉っぱがさわさわ揺れている。遠くに日高山脈の山並みが青く見える。

ここはトミベツ村の畑作酪農地域だ。

桃子の家は酪農家。健太と太郎はアスパラ、枝豆、玉ねぎ農家。ぼくの家はジャガイモ。ぼくらは同じ小学校の同級生。今年五年生だ。

この村の子ども達は、学校から帰ると家業を手伝うのが当たり前だ。でも本当は自由に遊びたい。けど家が忙しいのをわかっているから我慢して手伝いをする。

ぼくが家に帰ると、お父ちゃんとお母ちゃんがトラクターに大型機械を接続させてイモの収穫の準備をしていた。
「りく！ ランドセル置いたらすぐに手伝ってくれ」